



(1) 免疫学フロンティア研究センター (IFReC)

文部科学省が推進する「世界トップレベル研究拠点プログラム (WPI)」により形成された研究拠点の一つ。免疫学における世界トップレベルの研究拠点であり、感染症や自己免疫疾患、がんに対する免疫反応の解明とその制御などを目標に研究を行っている。研究のみならず若手人材の登用や育成にも力を入れている。

(2) ヒューマン・メタバース疾患研究拠点 (PRIME)

ヒューマン・オルガノイド生命医科学と情報・数理工学の本格的な融合を目指して、世界で初めて拠点化された組織。iPS細胞由来のオルガノイド(ミニ臓器)を用い、情報学を活用しながら、人類の夢とも言える「すべての病気の克服」に挑む。

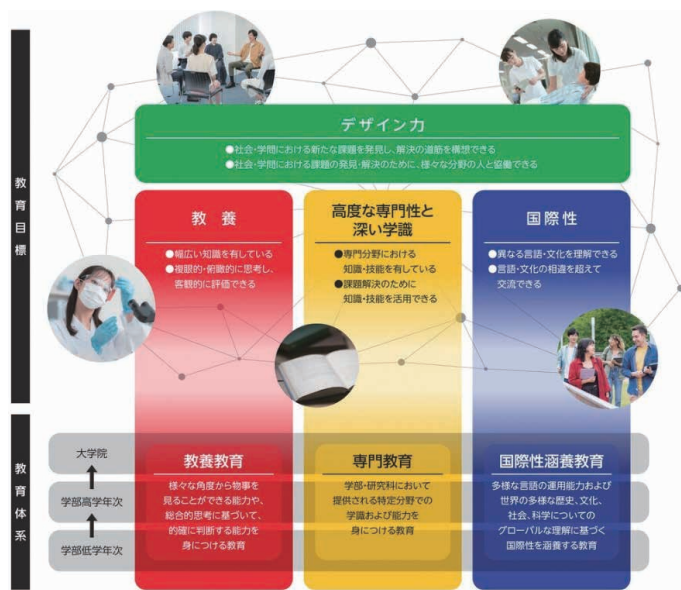
(3) 感染症総合教育研究拠点 (CIDER)

コロナ禍の経験を今後の社会に活かすべく、感染症の脅威から「いのち」と「くらし」を守るための総合知の形成を目指す拠点。感染症や免疫の専門家に加えて、社会学、心理学、行動経済学などの専門家も研究に参画していることが特徴。

(4) 阪大ふくふくセンター

在留外国人の増加に伴い、外国にルーツを持つ子どもの数も増え続けている。阪大ふくふくセンターでは、彼ら・彼女らが日本社会の中で、自身のルーツに誇りを持って生活できるよう支援を行っており、ひいては、日本に住む誰もが「複言語・複文化」を実践できる社会づくりを目指している。

大阪大学の教育体系



世界水準の研究が随所に。「実学の阪大」が加速する

数ある先端的・世界的な研究やユニークな取り組みのなかでも、国際的に大きな注目を集めているのが、大阪大学の量子情報・量子生命研究センター(QIOB)です。QIOB



くまのこうあつし
熊ノ郷淳総長

1991年大阪大学医学部医学科卒業。1997年同大学大学院医学研究科博士課程内科専攻修了(医学博士)。専門は内科学、免疫学。大阪大学微生物病研究所、免疫学フロンティア研究センター、大学院医学系研究科教授(2021年4月から大学院医学系研究科長)。2025年4月に第19代大阪大学総長に就任。日本免疫学会等の理事などを務める。

人文学・社会科学系から理工学、医歯薬系まで全11学部23学科を擁し、学部・に在籍する学生数は国公立大学で日本最多の大阪大学。大学院も15研究科45専攻を備える、国内屈指の研究型総合大学です。

同大学の「精神的源流」は、江戸時代の蘭学者・緒方洪庵が1838年に開いた「適塾」にあります。福沢諭吉をはじめとした社会の変革をリードする数多くの人材を輩出した適塾の「自由闊達」の精神は現代に受け継がれ、多くの学生や研究者が既存の学問の枠にとらわれない教育・研究に取り組んでいます。そこからは、「実学の阪大」の名にふさわしい革新的で社会に新たな価値をもたらす技術や知識が生み出されています。

世界最高水準の教育研究活動を推進する大阪大学の取り組みについて、熊ノ郷淳総長に語っていただきました。

大阪大学

〒565-0871 大阪府吹田市山田丘1-1 教育・学生支援部入試課 TEL 06-6879-7096 <https://www.osaka-u.ac.jp/ja>

「縦糸」と「横糸」が織りなす自由で先端的な学び・研究を展開。予想しなかった自分と出会う学生時代を

専門性の深化と学際的な広がり、調和により新たな価値を創造する

大阪大学は1931年に創設され、「地域に生き世界に伸びる」をモットーとして多くの社会課題に取り組んできました。同大学の理念を象徴する出来事の1つとして熊ノ郷淳総長が挙げるのが、1970年に開催された日本万国博覧会(大阪万博)です。国を挙げての一大イベントとあって、会期中は日本中から来場者が予想され、会場であった千里丘陵地域の交通機関は大混雑が懸念されました。

「このとき、駅の混雑対策として本学の研究者が鉄道会社や設備メーカーなどと共同で開発したのが、自動改札機です。今や自動改札機は世界で利用されています。本学が近隣地域の社会課題に取り組んだ成果は世界へと羽ばたいていったのです」(熊ノ郷総長、以下同)

熊ノ郷総長は大阪大学の目指すべき姿として、専門領域の深化と学際的な視野によって、新たな価値を創

造することを挙げます。専門領域を「縦糸」、分野横断的な広がりを「横糸」とすると、両者が調和をもって結ばれることが重要なのです。

「本学は『実学の阪大』と称されています。研究内容の多くが学内にとどまらず、社会実装につながっているのです。そのためには、市民、自治体、国内外の機関、企業など社会との連携が非常に重要なのです」

学部の枠を取り払った教育で「出会い」を後押しする

大阪大学の教育を特徴付けるプログラムの一つが、1年生全員が受講する「学問への扉(愛称:マチカネゼミ)」です。少人数のゼミ形式で行われるマチカネゼミのテーマは、「ビブリオバトル入門」や「わたしたちの暮らしと放射線」など多種多様。学生は学部・学科の垣根なく、興味あるものを自由に選択して受講できます。

また、大阪大学は、国立の総合大学としては外国語学部を持つ唯一の大学です。幅広い学部構成を活かして行われているのが「マルチリンガル・エキスパート養成プログラム」です。同プログラムでは、外国語学部と他学部等がそれぞれの専門教育を体系的に学ぶことができる環境を整えることで、言語と文化に精通し、グローバルな課題の解決に取り組むことができる人材の育成に取り組んでいます。例えば、外国語学部の学生が工学部のプログラムを受講して

自由闊達な校風が社会が求める総合力を養う

研究のさらなる推進や教育の充実を図る上で、学生を受け入れる「窓口」でもある入試制度の改革や、在籍する学生への支援の拡充は欠かせません。すでに同大学では学部から博士課程まで、入学金や授業料を免除する制度を整備しています。さらに近年、DE&I(ダイバーシティ・エクイティ&インクルージョン)推進の観点からも、女性研究者比率が低い分野の戦略的なすそ野拡大を目指し注力しているのが、女性理系人材の育成です。

大阪大学は令和8年度入学生の入試から、基礎工学部における学校推薦型選抜で「女性枠」20人分を設けます。同枠への出願者は、一般枠との併願も可能。多様な人材が集まり、従来以上に教育や研究が活性化することが期待されています。このほかにも理学部、工学部、基礎工学部の3学部では、入試の成績が優秀な女子学生合計50人に対して、「入学支援金」として1人20万円を支給する制度を導入しています。大学院では優れた研究成果を挙げた女子大学院生を対象として、「大阪大学女子大学院生優秀研究賞」を設けています。

同大学は、女子学生数、女性教員数ともに日本の国立大学で最多を誇ります。熊ノ郷総長は、「本学は、女性にとってのロールモデルが多い大学と言えます。学部生、大学院生、



豊中キャンパス 休み時間の風景

教員と、立場を超えて研究を志す女性性が交流できる場も豊富に設けています。若い世代がロールモデルと出会って後継に引き継ぎ、数年後には自らも後進に対するロールモデルになるという好循環を起こしていきたいです」と、今後の展望を語ります。

最後に熊ノ郷総長は、大阪大学で学ぶ意義を次のように語り、受験生へメッセージを送ってくれました。「社会で問われるのは総合力であり、その力を養うには、分野を超えた体験が不可欠です。自由闊達さを伝統であり特色とする本学は、垣根を取り払った学びや出会いを経験し、総合力を身につけるにはびつたりな環境と言えます。大学進学時には、将来をある程度イメージして学部や学科を選ぶでしょう。しかしその選択は、必ずしも大学卒業後の進路と一致していかなくてもかまいません。大学でのさまざまな出会いを通して新たな夢や目標を見つけ、入学したときは考えていなかったような道に進んでもかまわないのです。本学ではみなさんに、『予想もしなかったような自分』になってもらいたいです。それこそが総合大学である本学の役割であり、魅力です」

